

# ほんない歴史通信

第53号  
2009. 12. 1

## 佐原村の誕生

行政の基本的単位である市町村は、明治以来、何度か合併統合が行われ現在に至っているが、分村して町村を新設するというのは数少ない事例である。

江戸時代には今の大字がおおむね独立の村だった。たとえば佐原村（現大字町佐原地区）は左貫村、初原村、榎野地村にわかれていた。従って村の範囲は狭く人口・戸数も少なく、名主が村を治めるのも比較的楽であった。明治になって行政の能率化の必要から、最寄りのいくつかの村をまとめようとした。

明治六年に全国を十二大区、一〜六小区に編成した。学区制も改正され、例えば町付小学校は「第1大学区37番中学区町付小学校」と表わされた。これはフランスの学制を参考にしたものであるが、日本古来からの制度になじまないことから、まもなく大区、小区制は廃止され村単位に復活した。明治十七年大字地区は九村に統合され、戸長役場を設けた。初原、下金沢、左貫、相川、上金沢、榎野地、田野沢、塙の各村は合併して初原村となった。戸長役場は初原にあった。学校の名称も例えば現依上小学校は「初原小学校下金沢分校」となる。

明治二十二年市町村制により新たに九村として発足。このとき初原村は依上村に改正された。この年の合併で全国七一、三一四市町村が一五、九二一になった。

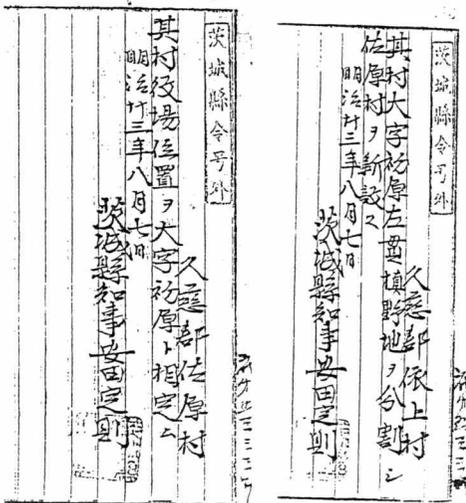
明治二十三年八月七日の「茨城県令号外」が残されている。「久慈郡依上村 其村大字初原左貫榎野地ヲ分割シ佐原村ヲ新設ス 明治二十三年八月七日 茨城県知事安田定則」 「茨城県令号外」 「久慈郡佐原村 其村役場位置ヲ大字初原ト相定ム 明治二十三年八月七日 茨城県知事安田定則」 これによって依上村から分離して佐原村が新設された。統合が進む中それに反する決定である。さらに行政の中心の役場がなぜ初原に決まったのか。左貫の方が人口が多く、左貫が村の中心と見るのが当然と思われるのだが。

佐原村新設と、役場所在地を初原にするという動きには、歴史的経緯と相俟って、初原地区その他の有力者の運動が強力に行われたものと思われる。

（大字町史参照）

これ以後、佐原村の役場は昭和三〇年の町村合併まで、初原に設置されていて変わることには無かった。

（石井）



## サシバの住める里山づくり

宮田国敬

ピツクイー・ピツクイー。今春も南の国よりサシバがやってきた。サシバは、渡りをするタカ類の一種で、春から夏にかけて日本の里山で子育てをして秋には南の国へ帰っていく。トビは身近に見られ人々に親しまれているが、サシバはめだたない里山の鳥なので、あまり人々に知られていない。サシバは大子町でも五月頃になると見ることができ、農家の人が田んぼに水を入れ、田おこしをして、代かき、田植えが終わる頃渡ってくる。サシバのえさは、田んぼのカエルやドジョウ、タニシ、イモリ、そしてヘビなどが主な食料であり、田んぼの生きものとともに生きている。

里山の鳥としてオオタカは知られているが、オオタカは主にキジバトやウサギ、キジ、ヤマドリなどを食料にしている。オオタカは最近、各地で見られるようになってきたが、サシバは急に減少している。サシバの住む場所は、広々とした水田でなく、小さな田んぼがあり、周辺に林や森がある静かな里山である。そんな里山も年々休耕田が目立ち、少なくなってしまう。でも大子町の里山を歩いてみると、まだ昔の小さな田んぼや畑を耕作している集落が残っている。とくに冥賀地区、生瀬地区にそんな田んぼや畑が見られる。そんな田んぼには、今もトノサマガエルや、日本アカガエル、アマガエル、ドジョウ、タニシ、イモリ、などが生息している。田んぼの畦もよく手入れされ、草花が咲き、カエルやイナゴ、クモ、バッタ、カマキリ、ミミズ、モグラなどが生息している。昔は、そんな田んぼがどこでも見られ、一年中水が入っていたので、生き物たちにとっては、田んぼが楽園だったが、今は、ほとんどの田んぼや畑は生き物が住めない場所になっ

てしまったのは、残念でならない。戦後、食料増産のため、化学肥料や、除草剤、農薬などを大量に使用、機械化により人手が掛からなくなり、農家の人にとっても稲作りが楽になった。だが一方、田んぼから生きものが減少してしまった。

昔は県内でも、トキが住む里山の田んぼがあつたと聞く、過日、佐渡ヶ島では、人工ふ化して育てられたトキが放鳥された。二度目の放鳥だが、無事生き続けることができる心配である。佐渡や新潟平野の水田の大部分は、生きものではない田んぼである。トキを守るためにも、もっと、もっと、生きものたちが生育できる、生きものと共に生きている田んぼづくりを推進する必要があると思う。

トキを守る佐渡の、自然や生きものを大切に生きる人々に負けないように、大子の里山の自然を守るためにも、サシバの住める里山づくりに取り組みたい。農家の人も農業や化学肥料に頼らない稲づくりをしている人もいるが、まだまだ少ない。一人でも多くの人が、環境に優しい農業に取り組みでほしい。水田は稲を育てると共に、たくさんの生きもの達の住む大切な場所であり、緑のダムとしての役目もある。環境保全のためにも大切なものだ。大子の里山の田んぼにトキが飛んでくるかも知れない、福島県まで来たのだから。

そんな夢を持ちながらせめてサシバが上空を舞い、カエルやドジョウなどが安心して住める田んぼや里山づくりにみんなので取り組みたい。今、田んぼの生き物ばかりでなく、土の中の生き物、川の魚、スズメやムクドリ、ホオジロ、ツバメなどの野鳥、そしてアキアカネやスズメの姿がめっきり少ない。異常気象によるものか原因は不明だが、何か寂しい気持ちでいっぱいだ。サシバよ来春もこの小さな田んぼに来てくれと、南へ渡るサシバに声をかけて上げたい。

## 後世に残す写真と気軽にメモ・活用する写真

飯島 一生

アナログ人間の私が初めて身近にデジカメを見たのは、もう十五年程前。カシオ「QV110」という機種で、二十五万画素程度、六万円位の機種だった、と記憶しています。パソコン上ではデータが重く、画質も悪く、プリントするにも時間がかかり、カラープリンターもべらぼうに高価でした。ただ、手軽で自由にプリントできるのが魅力で、いつかデジカメが主流になる日が来るのだろうと思いました。

「写真を撮る」とは、カメラで被写体を撮影し、プリントして保存・活用する、という行為です。目的は「真実をありのままに記録すること」であり、それが結果的に「後世に記録を残す有効な手段の一つ」として存在してきました。

現在、写真は手軽になり、デジカメで誰にでも気軽に撮れるようになりました。このような写真の殆どは「早くて」「安く」「失敗もあり」で、「数を打って当てる」「多少だめでも加工すれば良い」写真だと思います。デジカメがフルに力を発揮するにはもってこいで「後世に残しておく」ことはあまり考慮していません。

ここで確認したいのは、デジカメで写真を撮ることは、「後世に記録を残す有効な手段の一つ」にはならない、ということ。メモリー、ハードディスク、DVD、USB等に保存したデータは、いつまで取り出せるのでしょうか。メーカーは、これらの機種をいつまで生産するのでしょうか。レコード、カセットテープ、ビデオテープ、8ミリビデオ等の記録媒体は、もちろんその機器自体、店頭から消えつつあります。一時期、コダック社がフィルムをCDに書き換え、データとして扱えるサービス（プロフォトCD）を行っていましたが、昨年サービス

を休止しました。私も何枚かもっていますが、今の主流はDVDで、どこかにCDの機器があるうちに書き換えなければ見られなくなる運命にあります（家庭の8ミリビデオはDVDに書き換え中）。個人はもちろん行政機関においても、膨大な量のデータを書き換えていくためには、十分な予算の確保が必要になります。そんな保証はどこにもないでしょう。

また、デジカメは、撮影時のデータ量が写真の価値を大きく左右します。データ量を抑えて撮影してしまうと、はがき程度ならまあいいとしても、大きくプリントすることは不可能です。活用のためには、できる限り大容量で撮影することなのです。

さらに、写真を加工したり、データを共有、公開するにあたっては、必ずオリジナルを保存した上で行うことも必要です。安易にプリンターで印刷した場合の耐久性も不安です。

とにかくデータで保存することは、フィルムと違って状態が目に見えません。銀塩写真の場合、フィルムを見てオリジナルを探すことが可能ですが、デジカメはそうはいきません。きちんとしたタイトルや撮影データを作成し、容易に検索ができるようなシステムも必要になります。「紙」でも作成し、バックアップも必要になります。「とんだら終わり」なのです。

現状では、必要な写真の記録や保存は、フィルムできちんと撮影し、よい環境のもとで保存することがベストなのです。同時に写真を上手に効率的に活用するには、デジカメも併用するということがなんでしょう。つまり文化財の保護に携わる私たちは「後世に残す写真」と「気軽にメモする・活用する写真」を明らかに使い分けることが必要なのです。

あなたの数年前の旅行写真、すぐに見つけられますか。四ツ切りの大きさにプリントしたとき、満足できるものですか。写真は将来、価値が何倍にもなつて蘇るものなのです。

ふるさと歴史講座現地巡りに参加して

大森 政 夫

秋日和の去る九月二十七日、教育委員会主催によるふるさと歴史講座現地巡り「桜田門外の変と関鉄之介くゆかりの地（袋田・生瀬）を訪ねて」に参加させていただいた。参加するたびに思うことは、講師の先生方には、幅広い収集資料の提供と懇切な現地説明にただ頭が下がる思いである。

かつて知人から関鉄之介が袋田、生瀬に隠遁していた当時の日録や自筆の和歌、漢詩の幅物等を見せていただいたり、その人となりをお聞きしたことがあった。しかし、話や限られた史料を見ただけで、関係する現地を訪れる機会もなかった。

そうした折、時間にゆとりができたことを良いことに本講座に参加することによつて、個人ではなかなか見られない史料や所蔵品、遺跡などが直接その場で見る事ができる特典に期待して、楽しく受講している次第である。

さて、現地巡り当日、時間を設定した日程の中で、小澤先生の説明が車中から始められた。まず、最初に袋田温泉思い出浪漫館前に建つ関鉄之介歌碑について説明を受けた。歌碑は何度か見たことがあり、以前は現在地より少し奥まった滝川に近いところに建っていたように思う。碑面の和歌「河鹿鳴山川みすのうきふしにあはれははるの夜半にもそしる 平遠」の脇に「袋田のさとにひそみて有けるころよめる」とある。また、碑陰には「贈従四位關鐵之介先生歌碑碑陰」と題し、「袋田蟄居ノ歌碑ヲ此二建ツ」として、昭和十三年十一月十三日従四位峯間信吉謹撰と刻してある。次に近くの桜岡氏宅を訪問し、当主から関鉄之介が桜岡邸の蒔蕪会所で過ごした生活の一端を聞いた。当家の入口には、関鉄之介の全幅の書が掲げられ、その書風にかつて見た書を思い浮かべながら見入った。

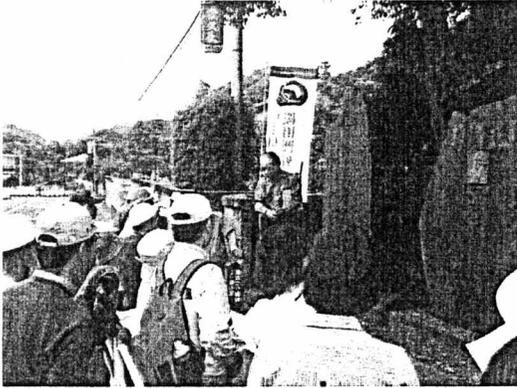
関鉄之介が潜伏していたという蒔蕪会所があった跡地は、長生園があった場所であることを知った。そういえば、長生園のあった場所と隣り合わせの東側には、旧道月居峠への急坂が続いている。蒔蕪会所からひそかに月居峠を辿り、月居山光明寺（観音堂）脇の古道を通り、頻繁に生瀬を訪れたことが想像される。また、一方の桜岡家（本宅）には、鉄之介が製作したといわれる小久慈石の硯や横笛が残され、興味深く拝見した。

次に生瀬側古道から月居山光明寺跡（観音堂）へ登った。急な勾配の南嶺が月居城跡で、当時の城主野内氏について野内先生から説明を受けた。また、当地方の産金の歴史について斎藤先生から、月居山での天狗党、諸生党の戦いについては、石井先生からそれぞれ説明を受けた。

光明寺跡の広場で和気あいあい楽しい昼食をとった後、安政四年（一八五七）高柴山で農兵の軍事訓練をしたという鉄之介にとつて思い出の地である全国植樹祭跡地を訪れた。地元では高柴山という固有名はなく、「高柴の山」ということであった。日程最後の高柴大沢の穴観音洞窟を訪れた。現地巡り史料によると、「鉄之介への探索は袋田の地にも迫り、彼は難病の治療をしながら、小生瀬村や内大野村、高柴村の庄屋、組頭など村役人のもとや大沢の洞窟に匿われたり、逃げ隠れていた」とあり、当時とそれほど変わっていないと思われる洞窟を見たと、切迫した状況の中で苛酷な生活を強いられた日々が彷彿される。

万延元年（一八六〇）三月桜田門外の変以後、関鉄之介が袋田へ到着したのが七月中旬から下旬頃といわれ、翌文久元年八月生瀬の地を離れるまでのうち九か月、隠遁生活を送ったゆかりの地を歩いてみて、また、新たな発見ができ、有意義な「ふるさと歴史講座現地巡り」となった。

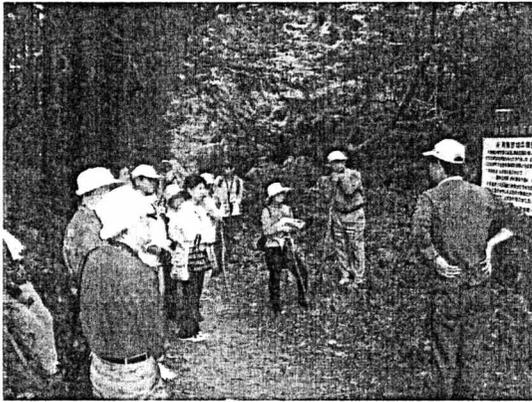
ふるさと歴史講座現地巡り風景



関鉄之介歌碑の前にて



鉄之介ゆかりの品々



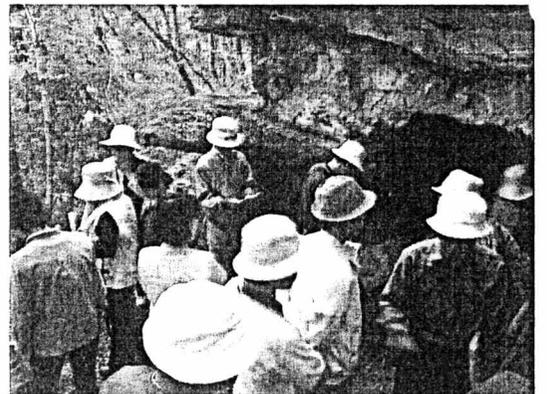
月居峠にて  
佐竹金山の話聞く



月居峠にて  
天狗・諸生の闘いの跡地



高柴区長益子常夫さんの話を聞く



大沢穴観音（洞窟）

## 【昭和の初め頃の農家一〇】 冬の仕事 わら細工

冬になると農家ではあまり忙しい仕事はなくなる。農閑期になるので春に備えての仕事をする。わら細工もその一つである。その頃は日中は木こりや木の葉さらい、冬作の手入れなどをするが、冬の夜長を利用して、夜は家の中で出来る仕事をやる。これを「夜わり」と言った。男は主にわら細工、女は裁縫などであった。

わら細工にも色々あるが、縄<sup>な</sup>編<sup>み</sup>、わらじ作り、俵編みなどが主なものだった。これらは春から秋にかけて農家で多く使う物ばかりで、農閑期に作って置かないと間に合わなくなってしまう。

農家で作るわらじは足中という足の半分くらいの長さのわらじである。かかとまである長いわらじだと、歩くにも仕事をするにも却って邪魔になるのだ。

足中は農家の主な履き物で、殆ど毎日の作業に履いていた。四、五日から一週間くらいで切れてしまうから、三、四人の農家で使うわらじの数は大変なものである。

縄も木こり、草刈りなどあらゆる仕事になくてはならないものだった。用途によって細いものから、太いものまで色々な太さの縄が要る。

わらじや縄を作るには先ずわらを湿してから柔らかくなるように槌で打ち準備する。これは子供達の仕事だった。毎日のように夕方になるとわら打ちをやらされた。

俵やむしろを編むには簡単な道具があった。俵編み機、むしろ編み機というもので、機械と言うにはあまりにも簡単だが、特にむしろを作る道具は結構工夫されてやや大がかりなものだ。

わら細工のなかでも本当のわらじや蓑、わら靴等は作りかたが難しく、特に蓑はもう作れる人は少ないと思う。

俵も今は紙袋になつて殆ど使われなくなつた。特に太い縄を作る事がある。「はよう」と言つて、子供の手では握りきれない程の太さだ。これは大人でも一人では出来ない。二人が向き合つて座つて、互いに自分で擦つたわらを相手に渡すというようにして次第に長くする。三つ擦りにするには三人いれば都合がいい。かなり重くなるし、まっすぐに絢うために縄を農家の梁を通して引き上げる様にする。長くなるにつれて縄を引き上げる。この引つ張り役は子供の仕事だ。「はよう」は、大きな力のかかる場所や重い物を運んだりする時に使う。

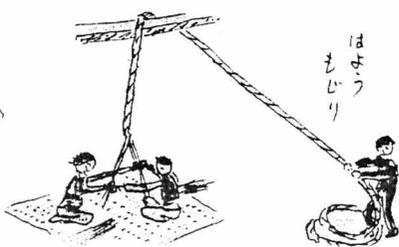
昔、池田の吉田神社が洪水で流されそうになつた時に、「はよう」で杉の太木に結びつけて難を逃れた事があった。時には馬をつないだり、子供のブランコを作つたりした。

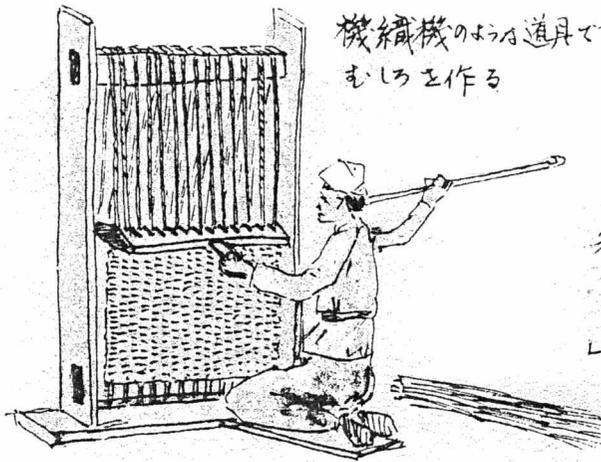
縄編みを「縄もじり」と言つたように、「はよう」作りの日を「はようもじり」と言つて、正月の十一日、「農の始め」の日にやることになつていた。

反対に細い縄を作ることもある。小手縄というもので、俵や菰を編んだり、こんにやくを干す連を編んだり、楮をこの小手縄に掛けて乾燥するのに使つたりと、あまり力の掛からない処に使うものである。

このようにわらは、衣食住すべてに関係していると言つていい程農家にとって大事なものである。

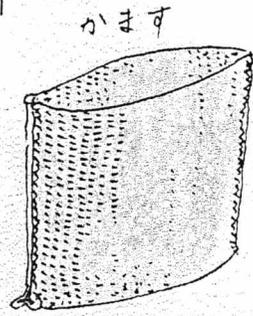
(石井)





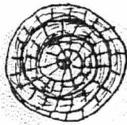
機織機のような道具で  
むしろを作る

わらの  
利用

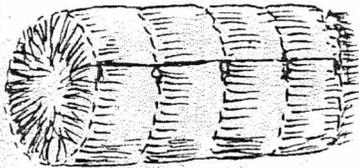


↑ むしろの両端を縄で  
編んで袋状にする

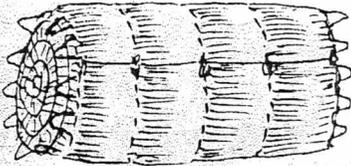
たわらを作る



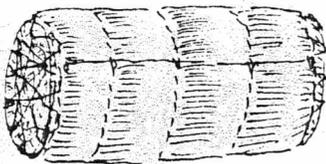
えんざ



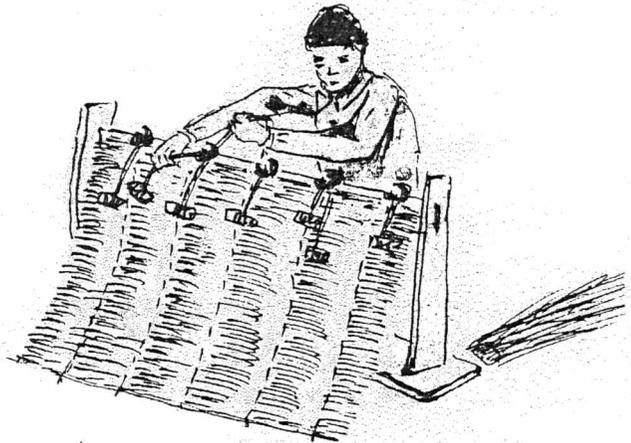
- ・ 俵の両端を結び  
円筒状にする
- ・ 両耳を折り曲げる



- ・ 円座を当て

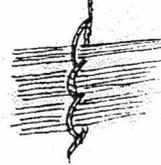


たわら、こもあみ

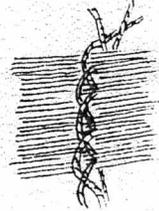


編み組が2本で こもを作る  
三本あみにして俵を作る

二本編み



三本編み



## 新聞記事にみる満州移民の断片(四)

— 第九次冷家店大子町開拓団の軌跡 —

昭和十五年一月十八日、先遣隊員一行は大子駅から満州へと向かった。この時の満州までの経路は不明であるが、ちなみに、後に大子在満国民学校の三代目校長となる清水勝男が応援作業班を率いて同年七月下旬に渡満した折には次の経路をとっている。大子町からまず富山県の伏木港に向かい、そこから船で朝鮮の清津に渡る、清津からは列車で図們、牡丹江を経由して哈爾濱へ、さらに哈爾濱から列車で綏化、北安を通って終着駅泰安へと四泊五日の旅であった(開拓の記録)。

満州へ渡った先遣隊の動静が初めて伝えられたのは、四月に入ってからである。四月二日付「いはらき」新聞は、「北満」冷家店「より 嬉しい開拓信来る」と題して次のように伝えた。

北満大子町開拓団々長菊池正修氏は一日明朗な通信を本社大子支局へ寄せてきたが、それによると、開拓地は冷家店附近一帯、耕地一七〇〇町歩、未耕地三三〇〇町歩、原野三六〇〇町歩、湿地一四〇〇町歩計一万町歩の広大な面積で本年度はまづ水田二五町歩畑作五六町歩を試作し、又植林計画を樹立し三万本乃至五万本を植林する、入殖は本年三月補充隊五十名八月第一本隊六十名と家族二百八十名、明十六年三月第二本隊百名、四月第一本隊家族二百四十名外に通訳四名、六月第三本隊七十五名と第二本隊家族四百名、八月第三本隊家族三百五十名と決定、小学校は本年八月家族招致と共に開校の予定である

入殖の対象地は合計一万町歩。大子地方での狭小な耕地しか知らない先遣隊員それぞれにとって、これは想像を絶する広さであったに違いない。昭和十四年三月に渡満し、開拓指導員幹

部訓練所で訓練を受け、一年後の十五年四月に農事指導員として大子町開拓団に合流した齊藤良治は、赴任の際の印象を記している。「人家が一軒も見あたらない。唯々広い原野でどこを眺めても家が無い全く広い一望千里地平線だけです」と(同上書)。また、同記事が伝える計画によると、十六年八月までに六回にわたって総勢一五五九名が入殖することになっていた。しかし、現実はそのようならなかった。十七年十二月二十三日付「いはらき」新聞は記している。「拓士先遣隊は現在九十一戸二百六十名の多きを加へるに至つたが然しながら当初の理想計画から見れば今一段の送出に努力せねばならぬ状況にある」。当初の計画と現実との乖離に留意しておきたい。なお、同記事の末尾にある大子在満国民学校は、予定より半年余遅れた十六年四月に開校している。

大子町の分村移民が始まって間もない昭和十五年五月、拓務省は開拓地に向けて応援作業班を派遣するためその人員割当を各府県知事宛に通知した。茨城県も、「在満開拓途上にある本県関係の分村分郷に対し成るべく将来開拓農村として渡満せんとする者を選抜して各関係開拓団に派遣せしめ以て建設並に生産拡充の促進に拍車をかけ併せて後継開拓団の充実に生産洲開拓応援作業班を編成する事になった」として、県内分の割当を大子町二十五名(派遣先冷家店大子町開拓団)、小里、賀美、□田、七会、北山内、竹島、竹原、石崎、豊田、黒沢の各村から三名ずつ計三十名(派遣先龍江省甘南義合開拓団)とした(十五年五月七日付夕刊)。選考に当たっては、「身体検査を厳重にして将来開拓民として定着する者」を優先し、女子も可となっていた。採用者には百円が支給され、滞満期間は二ヶ月である。大子町は早速選考の準備にかかり、「出来得る限り趣旨に副ふべく班員銜には慎重を期し」(十五年五月十二日付)た結果二十六名が選ばれ、七月二十三日に満州に向け出発した。

(齊藤)

## 【資料紹介】昭和十七年「炭焼く人々」について

日米開戦、「皇国海軍」のハワイの真珠湾奇襲作戦の戦果が大子町の人々の耳にも入つてくると、貯蓄・増産の打合せの常会が開かれるようになった。当時、人里離れた山中で暮らしていた人々の生活を、昭和十七年二月一日発刊の雑誌『新女苑』は「炭焼く人々」として掲載しているので、紹介しよう。

戦いの嵐が烈しく吹きすさぶ厳寒を迎へて、燃料確保、薪炭増産に応へ、黙々として、山奥深くに働く炭焼く人々を訪ねる。此処は常陸の国、久慈の深山である。袋田の景勝に囲まれ、清冽な谷川のせせらぎと無限の薪炭原木が林立して起臥する山また山。炭焼く人々は夫婦子供、一家揃つて此の山中に深く生活の根を下ろして働いている。元締めから割当てられた山に小屋を造つて彼等の生活を営み、その山の林を伐採して、炭を焼いて行く。やがて割当てられた山の木が切り尽くされると最後に自分達の小屋を炭に変えて、次の山に移っていく。

此処では七軒の小屋が同じ元締めの帳場で、生活の歓びや悲しみを共にして、家族の様に信頼し、生活している。町や里から遠く離れて山から山へ移動する小屋の生活は非常に不便な生活ではあるが、純朴で健康的だ。

落葉の上へ真白に降りた霜を踏んで早朝から仕事にとりかか。伐木や、竈づめ、火つけ、運搬と次々に仕事の間断なく続いて行くのである。

先づ見事な林の山に小屋の人々は巧みに鉋を当てる。鋸をひく。手際よく、たちどころに何本かの木はめりめりと倒れていく。幼児を背負った妻も甲斐々々しく手助けをしている。伐り倒された木は山の窪地に積まれ、薪に割られて整然と積み重ね

られる。これは柵木と呼ばれ、水分を取り去るためによく乾燥させるのである。竈づめは此の乾燥された薪をつめるのである。竈の中に一人が入り、一人が外から薪木を運ぶ。炭焼きは常に二人の手が必要なのだ。竈に薪を入れる時も、竈から炭を出す時も二人で協力する。殊に山に生活し、仕事を続けなければならぬ彼等にとつては夫と妻の協力が一番望ましいのである。

小屋各自が別個の竈を持ち、山を持つて各小屋の増産に拍車をかける。帳場の同一な七軒の小屋も、仕事の上では激しい競争相手になるのだ。竈に薪を入れ終わると入口から火を付ける。乾き切った薪はばちばち山の風を受けて燃え始める。竈の後の煙突から煙が上がり出した。竈の口を戸まひ（土塗り）してから後五十時間、煙は昼夜の別なく上り続けている。煙が止つて後三昼夜、竈に土を塗り密閉したままで置く。やがて立派な薪炭となつて運び出されるのである。横九尺、縦二間の竈で四十俵の炭が造り出される。良くしまつた見事な炭は一定の大きさに切られ、俵に詰め込まれる。小屋の人々は出来上がった炭俵を四俵づつ梯子に結んで、背負つたり、馬の背に積んで、落葉を踏み、谷川を渡つてトラックの通ふ里まで搬出する。小屋の人達の手を離れた炭は元締めの倉庫や、県の倉庫に集荷され、県の指令に依つて消費者の手に運ばれるのである。

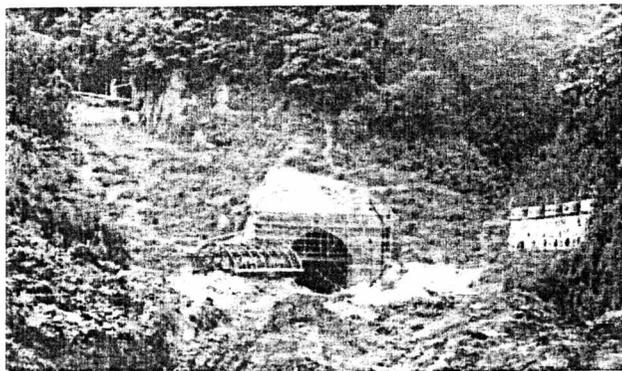
やがて静かな夕闇が落ちる頃、山から一里も下つた里の国民学校に通ふ子供達も帰つてくる。一日の疲れを洗う青天井の風呂を浴びる頃、小屋にはぼとりとランプの明かりが点つた。炭運ぶ馬への秣も済み、鶏へ餌を与え、山羊や犬猫の食事も終わると、林を縫つて吹く風の音だけで、七軒の小屋は静寂な休息に入る。山の窪地、窪地から立ち上る竈の白い煙だけが休みを知らない様に仕事を続けているのみである。

（野内）

【ふるさと写真帖】

新月居トンネルの開削

月居峠越えの道は、屈曲の多い急峻な坂道であるため、明治十七年（一八八四）茨城県令見寧の命令によって県道に編入され、月居山南嶺の中腹に月居トンネルの開削が計画された。工事は水戸の囚人三〇〇人を使い、明治十九年に長さ一四〇間（約二五〇メートル）のトンネルが完成し、開通した。しかし、南嶺を走る道路は、曲折の多い峠道であり、冬期の凍結時は危険がともなっていた。



新月居トンネルの開削工事（上方が旧トンネル）

昭和五十一年（一九七六）第二十七回全国植樹祭が大子町高柴台で開催されることになり、その関連事業として主要地方道日立―大子線を整備するにあたって、小生瀬―袋田間を結ぶ〇・八キロメートルの新たな道路（トンネルを含む）の開削が計画された。工事は昭和四十八年十一月から五十一年三月にかけて、事業費八億二千万円を投じて行われ、同五十一年四月に開通した。トンネルの区間は五四〇メートル、通交は有料であったが、午後七時～翌朝七時の時間帯は徴収されなかった。通交料金は、昭和六十二年二月一日から無料となった。（小澤）

編集 後記

町民の日頃の文化・芸術・芸能等の活動成果を発表する第三十八回大子町芸術祭が十月二十九日から十一月三日まで中央公民館で開催されました。洋画、彫刻、工芸、俳句、華道、茶道、芸能、音楽等、日頃の活動成果として九二九名から四八九点の発表がありました。入場者数も一、五〇四名、音楽祭・芸能祭来客数六一七名と、多くの町民が鑑賞し、心の豊かさ芸術文化への関心を高めることができました。

また、十一月二十八日には、第三十三回茨城県郷土民俗芸能の集いが常陸太田市パルティホールで開催され、県内に伝承されている指定文化財の民俗芸能が披露されました。大子町からは、県指定文化財「浅川のささら」が出演し、勇壮な舞が披露され館内から大きな拍手がありました。他の出演団体は次のとおりです。〇八木節源太郎踊り・城里町（町）〇田宮ばやし・土浦市（県）〇磐戸神楽・古河市（県）〇明神ばやし・常陸大宮市（市）〇西金砂神社田楽舞・常陸太田市（県）（斎藤裕也）

編集人

斎藤 典生（茨城大学人文学部）  
野内 正美（茨城県立日立商業高校）  
石井喜志夫（元 教員）  
小澤 圀彦（元 教員）  
斎藤 裕也（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付  
久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 ☎0295(72) 2627